

経営倫理士の目線で古典を読んでみた♪

～古典から学ぶ経営価値四原理システム～

経営倫理士コンソーシアム

代表幹事

北村和敏

第2回目投稿（2025年10月30日）

『自由論』『女性の解放』J・S・ミル



前回に引き続き、J・S・ミルの質的功利主義についてお話しします。ベンサムの量的功利主義を人間の血が通ったものに仕上げたミルの功績は偉大です。そこに到達するまでのミルの苦悩と努力はまさにドラマでした。人間の成長は人との“ふれあい”の中から生まれることをあらためて認識させられます。

父ジェームズから英才教育を受けて育ったミルは精神を病んでしまいます。詰め込み教育の弊害なのか、教え込まれた功利主義に疲れてしまったのかは分かりませんが、20代前半にうつ病を発症しています。まあ、とにかく英才教育の行き過ぎがミルを人造人間化していったのでしょうか（辛）。ちなみに父ジェームズはベンサムの信奉者だったようです。

それを救ったのがティラー夫人との出会いです。彼女とのプラトニックな不倫は何んと20年間も続いたわけですから、ミルにとって運命的な存在だったのでしょう。この時代としては先進的な考えであった”女性の解放”、そして”女性参政論者”であったティラー夫人の思想はミルに人間の自由の概念を芽生えさせます。そしてミルは多数派の専制からの自由を克明に書き上げた『自由論』と『女性の解放』を世に出します。

実はこのミルの著作は明治初期の日本にも多大な影響を及ぼしたようです。明治維新により徳川幕府が倒れ、日本は近代国家へと向かいます。日本は欧米の思想を積極的に取り入れます。ミルの『自由論』や『女性の解放』なども翻訳され、日本の多くの知識人たちに読まれたようです。明治政府の要職者たちはミルの書籍をこぞって精読したようです

が、とくに感銘を受けたのが肥前・佐賀藩出身の大隈重信でした。これは意外と知られていないようですが、大隈は開明的な思想の持ち主だったようです。この時代の士族は儒教とくに朱子学をもって思想教育を受けています。基本的には男尊女卑の思想がこびり付いています。そんな中、大隈は若いころから実用的でない朱子学に違和感を持っていたようです。朱子学だけではありません。佐賀藩が本家である武士道の精神が書かれた『葉隱』も大隈にとっては文明の発展には邪魔だと言わんばかりの過激な態度で藩校の講師陣とぶつかっています。当時の藩校である弘道館から退学処分をくられます。大隈の合理主義、実用主義、そして開明思想が当時の規則バリバリの藩校では受け入れ難かったのは当然ですね。

しかし、時代は大きく変わります。明治維新を境に明治政府は積極的に欧米の思想を取り入れて近代化を図ったわけです。ミルの『自由論』、そして『女性の解放』なども翻訳されています。大隈にとっては”わが意を得たり”って感じだったでしょう。たぶん大隈ほど明治新政府の中で開明的な人物はいなかったでしょうね。薩長出身の要職者は基本、頭が筋肉ですから、この開明的な大隈の思想には付いていけなかつたのではないか。大隈はイギリスの思想を取り入れ、イギリス型の立憲君主制を構想したようですが、これが急進的過ぎたのか、当時の実力者であった伊藤博文には受け入れ難いものになり、大隈は政界を追われます。これが有名な「明治十四年の政変」です。

大隈の凄さは下野した後の行動です。彼はすぐに立憲改進党を結成し、来たるべき政党政治に備えます。そのための人材育成のため、高等教育の場として早稲田大学の前身となる東京専門学校を設立し若者の教育に尽力します。そうなのです。大隈は政治家であると同時に、教育者であり、思想家でもあるのです。当然、同じ教育者として福沢諭吉とも親密となり、日本の教育の将来について構想を練り上げています。この大隈の活動を不信の目で見つめるのが、頭が筋肉の薩長出身の政府要人たちですよね。まあ、ざっくり 10 年以上も先が見えている大隈の思想は、頭が筋肉マンたちには理解ができないどころか、恐怖さえ与えたかも知れません。

そうなのです。まるで西郷隆盛が薩摩で私学を創設し、新政府打倒を企てているのではと疑ったのと同じような疑心暗鬼が新政府内に起こったようです。大隈にとっては訳が分かりませんよね。そのせいで新政府からの誹謗中傷が絶えなかったようです。

まあ、その程度で活動を止める大隈ではありません。ミルの思想を日本で実現するかのように、今度は女性の高等教育のための女子大学の創設に取り組みます。そのころ欧米の女子教育の必要性を感じ、活動していた成瀬仁蔵と広岡浅子らに協力し、日本女子大学創設の実行委員長に就任しています。1901 年に東京目白に日本初の女性の高等教育のための

大学が創設されます。ミルがティラー夫人の影響を受けて書き上げた『女性の解放』を現実のものにするための教育機関でもあったのです。それまでの男尊女卑の世界観を脱して、男女の社会的な性的役割を否定するものです。今風に言えば、男女共同参画社会の実現ですね。

驚きですよね。ミルの思想は海を越えて、じつに 100 年以上も前の日本に影響を及ぼしたのです。大隈の女性高等教育の目的は、単なる良妻賢母のための女性育成ではないところです。男も女もそれぞれの強みを活かして対等に社会で活躍する人材、そうなのです、経済的にも政治的にも活躍できる社会を構想していたのです。当時日本の近代化に尽力していた日本資本主義の父と呼ばれた渋沢栄一は女性の教育には賛成していますが、それはあくまで良妻賢母を目的したものでした。そういう風に見ると大隈の思想の斬新さがよく分かりますよね。現代人は分かっても、「朱子学」や「葉隱」の教育に染まった人たちにはまるで超未来の話に聞こえたかも知れません。

ミルが生きた 19 世紀前半の英国では、産業資本主義が勃興し、経済市場が発展したため、市場労働である公的領域と、家庭労働である私的領域に分かれ、性別役割分業の世界が拡大しています。教育制度は男性中心であり、時代は家父長制バリバリの時代です。そんな時代に抗っていたのがティラー夫人たちであり、それは家父長制の否定であり、完全なる男女同権を主張します。英國に女性の高等教育機関ができたのが 1848 年と言われています。日本は英國に遅れること 50 年後に日本女子大学が出来るわけですから、明治日本の激変ぶりと言うか、欧米の思想を取り入れる早さはまるで乾いたスポンジが水を吸い取るような時代だったのでしょうか。

感想がミルと大隈のフェミニズムに終始してしまいました。まあ、人間は人の出会いによって共感と共鳴を繰り返しながら、次の時代へと思想を醸成していくようです。ティラー夫人→ミル→大隈へと思想の繋がりをみているとよく理解できますね。ミルはこんなことを言っています。「人間が高貴で美しいと言える人物になるのは、個性を育て際立たせることによってである」と。ミルの思想はどこまで行っても人間が個人として尊重されることに尽きるようです。こんな思想が明治の初期に日本に入ってきて大隈たちによって経済・政治・教育面に影響を与えられたことは幸運だったと言えますね。しかし、その後の日本は軍国主義、大戦争、そして戦後の高度成長期という男女の役割分担社会へと 100 年のバックスピンが掛かってしまいました。

しかし、現在、日本が直面している高齢化、少子化の問題も、また益々進展するグローバル化、デジタル情報化の問題など、こうした問題の対応を考えるとき、女性の豊かな感性が不可欠な時代となってきたいるのを感じますよね。環境問題やエネルギー問題、さら

には資源問題などなど、また難民問題や地域紛争などの国際問題に直面するとき、男のセンスだけでは解決しえない問題が山積みされており、男性中心で築かれた近代工業化社会、近代資本主義社会、そして近代文明の歩みが今、問い直されているようです。

願わくば、今こそミルを映画化して欲しいですね。そうなのです。今こそ、ミルや大隈の思想を現代人は知るべきです。そして次の世の中を一人ひとりが考えるきっかけになれば最高ですね。（北村）